

日本英語学会第29回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月12日午後)

司会 大堀壽夫 (東京大学)

「英語における名詞の非飽和性について」

木本幸憲 (日本学術振興会特別研究員 DC)

本論では西山 (2003) が日本語で提案している名詞の「非飽和性」という概念を、Langacker (2008) の認知文法の観点から捉え直し、それを「補部を要求する名詞」として一般化する。例えば *destruction*, *friend*, *life* などの名詞は *table*, *grass* などに比べて、何の破壊か、誰の友達・人生か、という情報が必ず必要とされる概念である点で「非飽和名詞」である。

これによって下のようないわゆる「間接照応」の限定詞選択の差異を説明することを可能にする。

(1) *the kingdom and {the/its} destruction*

(2) *They've just got in from Beijing.*

{The/?Its} plane was five hours late.

ここでの *the* と所有格の分布は、当該名詞が補部を要求する名詞であれば所有格の共起が優先され、単なる修飾部を要求するのみの名詞であれば *the* との共起が優先される。

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1 Stanford University Press. Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. OUP. 西山祐司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房.

「英語における可算具象名詞の不可算転換の容認度」

小寺正洋 (阪南大学)

認知文法では可算/不可算は名詞自体に内在せず、ほぼすべての名詞は両用法を持ち得るとされ、'cat', 'car' などが *object-schema* から *substance-schema* へ不可算転換する例が挙げられる (Taylor: 2002 [1])。本発表では、

英語母語話者 (英・米・豪 25 名) へのアンケート調査に基づき、物理空間に於ける指示対象の個性喪失に伴う英語可算具象名詞の不可算転換に対する容認度について検討する。

まず、Pelletier 1979, Allan 1980, Langacker 1991 などが挙げる不可算転換文の容認度が決して高くないことを示した上で、'car', 'bottle', 'toy', 'tree', 'spider' などの典型的な可算具象名詞が個性喪失 (*homogeneity*) と拡張性 (*expansibility*) の2重の不可算誘因を与えられても、不可算転換の容認度は全体的に低いことを示す。また、個性喪失を表す前置修飾を伴うと可算・不可算ともに容認度が有意に高まり、加えて拡張性を表すコンテキストを除くと、可算用法の容認度がさらに高まることを示す。

[1] *Cognitive Grammar*. OUP.

「日英語話者はいつ直示動詞を使うか：直示性の言語化に関する実験研究」

松本 曜 (神戸大学)

日英語話者がどのような状況において直示動詞を用いるのかを実験的に考察する。その使用の条件の解明のために、ビデオクリップを使った発話実験を行い、様々な移動シーンをどのように両言語話者が表現するかを比較する。その結果から、直示動詞は話者との関連性が高い状況で使われる傾向があることが両言語を通じて明らかになった。その一方、両言語にはいくつかの点で差が見られた。日本語では直示動詞の使用頻度が高く、話者の位置あるいは話者の領域への移動であれば *come* 系の動詞がほぼ必須的に使われるのに対して、英語においては、より高いレベルでの話者関与性 (話者とのインターアクション) がある場合にのみ *come* 系の動詞が使われる。この差を、競合という概念を用いた移動動詞の類型論、及び日英語の主観性の相違から考察する。

第二室 (11月12日午後)

司会 縄田裕幸 (島根大学)

「英語史における名詞後位の属格の消失 について」

茨木正志郎 (名古屋大学大学院)

本発表では、英語史における名詞後位の属格の消失について、属格-(e)s/'sの史的発達の観点より説明を与える。当該分野の先行研究に Allen (2008) や Ohmura (1995) があるが、これらはいずれも名詞後位の属格を含む統語構造を明示していない。また、Allen (2008) では、限定詞の屈折と名詞後位の属格の消失の関係が指摘されているのみであり、両者の関係について理論的説明が与えられていない。本発表では、Ibaraki (2010) で議論された属格-(e)s/'sの歴史的発達が名詞後位の属格の消失に関係していることを提案する。古英語期の名詞後位の属格を含む名詞句は2つのDPを伴う二重DP構造を持ち、名詞後位の属格が下位のDP指定部を占め、主要部名詞が下位のDP内から上位のDPへと主要部移動すると仮定する。その後、中英語初期に属格接辞がD主要部を占める要素へと変化したために、二重DP構造内において主要部移動が不可能になり、その結果として名詞後位の属格が消失したと主張する。

[1] Ibaraki (2010) "On the Distribution of Genitives in the History of English," *EL* 27.

“On the recent emergence of (the) thing is, ... as discourse marker: A case from the history of American English” (E)

Reijirou Shibasaki

(Okinawa International University)

This study pays attention to the recent development of (the) thing is as discourse marker (DM) in PDE, based on *The Corpus of Historical American English (COHA)*. All related constructions that are detached from the following complement clause are counted and examined. Those constructions in which the light noun *thing* appears with adjectival modifiers such as *great*, *important*, *only*, *strange*, etc., - i.e. (the +)

adjective + thing + is, - are treated separately from the (the) thing is construction. The determiner-headed *the thing is* construction is considered separately from the counterpart determiner-less construction. The present survey reveals that *the thing is* emerges as DM around 1930s. While *the thing is* is much more frequent as DM, the determiner-less *thing is* DM would also be worth consideration because it is gradually though not steadily increasing to the present (cf. [1], [2]).

[1] Brinton, L. J. (2008) *The Comment Clause in English*, Cambridge UP. [2] Company, C. C. (2006) "Zero in Syntax, Ten in Pragmatics," *Subjectification*, Mouton de Gruyter.

「初期近代英語における否定接辞付加語と 否定語の競合」

米倉 綽 (広島女学院大学)

否定表現には、大きく分けて、否定接辞 (*in-, un-, dis-* など) を用いる場合と否定語 (*not, never* など) を用いる場合があるが、その表す意味は必ずしも同義ではない。例えば、*John is not happy.* と *John is unhappy.* は同義ではない。しかし、*Peter is not married.* と *Peter is unmarried.* はほぼ同義である。さらに、統語構造上の相違もある。例えば、*The unhappy woman cried.* とは言えるが、**The not happy woman cried.* は非文となる。このように二つのタイプの競合がみられるが、否定語の史的研究には Ukaji (1979), Ogura (1999), Iyeiri (2005) などがある。また、Tottie (1980) は現代英語における否定語と否定接辞付加語との競合を論じている。本発表では、この競合が初期近代英語ではどのような要因に基づいているのかについて、シェイクスピアの英語を中心に考察する。

第三室 (11月12日午後)

司会 小川芳樹 (東北大学)

“EPP on Predicative Phrase and Internal Expletive Hypothesis”

石野 尚 (関西学院大学大学院)

本論の目的は、あらゆる語彙的述語の最大

投射 (PredP) はその外項の有無に関係なく strong phase を成し、その指定部には例外なく EPP が働いていることを理論的要請として指定し、(1) 虚辞が PredP 指定部に基底生成され得ること、(2) PredP 指定部が A-movement の target になり得ること、がこの指定の系として導かれることを示すこと、及びこの推論を経験的事例で実証することである。より具体的には、(1) predicate fronting の LF 再構成が Proper Binding Condition に従うと仮定する Takano (1995 [1]) の提案を進展させ、虚辞が PredP の指定部に基底生成 (external merge) され得ることを提示し、(2) PredP の指定部には internal merge も起き得る、即ち A-movement の landing site として raising の中間痕跡が存在することを例証する。以上を併せ PredP 指定部での EPP の存在を証明する。

現行理論では、C(-)P と vP は phase であり、phase 内からの抜き出しの容認可否を説明するために vP に対して 2 種類の phase (strong/weak) を仮定しているが、本論の提案とその実証が正しい限りにおいて、そのような仮定は概念的にも経験的にも不要となる。

[1] Takano (1995) "Predicate Fronting and Internal Subjects," *LI* 26. [2] Huang (1993) "Reconstruction and the Structure of VP: Some Theoretical Consequences," *LI* 24. [3] Barss (1986) PhD. Diss.

「英語における主要部繰り上げ分析：比較節と自由関係節の統一的説明」

戸澤隆広 (北見工業大学)

Chomsky (1995 [1]) は、連鎖が満たすべき条件として、均質性の条件を提案している。しかし、この条件は主要部移動などの様々な問題を含む。従って、この条件は破棄するのが望ましい。そうすると、移動要素が投射するというこれまで認められなかった投射様式が理論的に可能となる。事実、Chomsky (2008 [2]) は、移動要素が語彙的主要部なら、それは投射できるとしている。本発表では、比較節は形容詞が移動し、投射することで得られ、自由関係節は wh が移動し、投射することで得られると提案する。これにより、これまで注目されてこなかった、比較節と自由関係節

の共通特性、すなわち (1) 自由関係節で観察される matching phenomena が広い意味で比較節にも観察されること、(2) 移動要素は前置詞を随伴できないという事実、(3) 束縛現象などが自然な形でとらえられることを示す。

[1] *The Minimalist Program*. [2] "On Phases" *Foundational Issues in Linguistic Theory*, MIT Press.

「主要部後置型言語における動詞移動」

三原健一 (大阪大学)

主要部後置型言語における動詞移動の有無は、動詞句副詞と否定辞の位置関係からそれを立証する Pollock (1989) の論点が適用できない。本発表では、Cartography (Rizzi 1997 など) の句構造理論に依拠して日本語の連用形・連体形・終止形を取り上げ、否定辞と「だけ」句の作用域解釈、及び、否定対極表現の認可に関する事実を説明するためには、動詞移動を仮定する必要があることを主張する。その過程で、動詞移動があるとする Koizumi (2000) の 3 つの主張のうち、等位構造に関するデータは依然として有効であることを示す。本発表は、主要部後置型言語での動詞移動の存在を検証する新たな手段を提供するばかりでなく、普遍文法における動詞移動の偏在性をも強く主張することになる。

[1] Rizzi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," in Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, Kluwer. [2] Koizumi (2000) "String Vacuous Overt Verb Raising," *Journal of East Asian Linguistics* 9. [3] 三原 (2011) 「活用形と句構造」『日本語文法』11.1.

第四室 (11月12日午後)

司会 奥野忠徳 (弘前大学)

「動詞不変化詞構文の2種類の目的語について：壁塗り構文・結果構文・使役移動構文との比較から」

福井龍太 (筑波大学大学院・三重大学)

動詞不変化詞構文 (VPC) の目的語は通例 Figure であるが、Ground を目的語とする VPC も存在する。本発表ではまず、Ground を目的

語とすることが可能である VPC について詳述する。さらに、壁塗り構文との比較や不変化詞の性質についての検討から、Figure が目的語である VPC は使役移動構文であり、Ground が目的語である VPC は結果構文であることを示す。また、Ground が目的語である VPC に、*off* や *out* は出現できるが、*on* や *in* は出現できない事実について、Levin and Sells (2007 [1]) は、Wechsler (2005 [2]) の結果構文に出現する形容詞についての議論を援用し、説明を試みている。しかし、小野 (2007 [3]) が提示する結果述語についての議論を鑑みると、Levin and Sells の議論には問題があるといえる。この点について、不変化詞と前置詞の相違に着目して説明を試みる。

[1] “Unpredicated Particles” *REDPILL*. [2] “Resultatives Under the ‘Event-Argument Homomorphism’ Model of Telicity.” [3] 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」.

“Numeral Indeterminate Phrases” (E)

Toshiko Oda (Tokyo Keizai University)
Indeterminate phrases in Japanese have been studied in syntax and semantics. However, there is yet another type of indeterminate phrase that has not been discussed. An example is *na'n-satu-mo* (what-CL-MO), which intuitively means a **large number of volumes**. I assume that *na'n(what)* denotes a set of numbers, and call it a *numeral indeterminate phrase*.

The intuitive interpretation of a **large number** is unexpected. Normally, *mo* that follows an accented indeterminate phrase induces universal interpretation, as in *da're-mo* (everyone). However, *na'n-satu-mo* does NOT mean ‘every number.’

This paper investigates how the intuitive meaning of a **large number** arises. I will argue that the interpretation is best accounted for by assuming that *mo* is an existential quantifier. I will further argue that *mo* also serves as a scalar particle “even.” In other words, *mo* plays two roles at the same time.

[1] Shimoyama (2006) “Indeterminate phrase quantification in Japanese,” *Natural Language Semantics* 14: 139-173. [2] Nakanishi (2008) “Scope of Even,” *NELS* 38.

「非対格仮説と 1AEX の論理」

鷲尾龍一 (学習院大学)

非対格仮説の妥当性を東アジアの諸言語に基づいて考察する場合、日本語は特別な位置を占める。西洋諸語以外では確認しにくい「助動詞選択」の現象が上代日本語では明確な形で確認され (Washio (2004 [1])), 現代の東アジア諸語では観察されない自動詞の受動化が日本語では生産的プロセスとして許容されるからである。日本語の自動詞受動は、非対格仮説の根拠とされた非人称受動とは異なる「人称」構文であるが、分析によっては、1AEX に基づく議論を日本語でも再現することができる (Washio (1989 [2], 2006 [3])).

本発表は、非対格性論議に対する日本語研究からの貢献のあり方を主要なテーマとする。自動詞受動と 1AEX をめぐる諸問題を中心に、事実認定の歴史、残された問題、今後の課題について、斉木・鷲尾「ヴォイスの複合」(近刊[4])などを踏まえつつ論じてみたい。

[1] “Auxiliary Selection in the East,” *JEAL*. [2] “The Japanese Passive,” *TLR*. [3] “Unaccusativity and East Asian Languages” 『中国語学』. [4] 沈力・影山 (編) 『統語構造と意味解釈』くろしお.

第五室 (11月12日午後)

司会 片岡邦好 (愛知大学)

「日英語会話における聞き手行動の 社会言語学的考察」

植野貴志子 (日本女子大学)

日英語会話の対照研究においては、聞き手と話し手の協力の度合いが高い「共話」的な日本語会話に対して、聞き手と話し手が相対し情報をはっきり示すことが重視される「対話」的な英語会話の特徴が論じられてきた (水谷 1993 [1])。本研究では、地位・年齢の上下差がある二者による日英語会話における聞き手行動を分析し、互いに聞き手としてどのような働きかけを行っているのか、また、そこに上下関係がどのように影響を与えているのか (或いは、いないのか) を分析する。情報源として語る相手に対して行われたあいづち

を含む全ての発話を聞き手行動として抽出し、その頻度と種類を調べた結果、日英語の聞き手行動は、従来指摘されてきた日本語の共話的性格、英語の対話的性格を表すものであったが、日本語における共話的聞き手行動のあり方は、上下関係によって影響を受け、調整されることが示された。

[1] 水谷信子 (1993) 『共話』から『対話』へ』『日本語学』12-4.

「日本語インタラクションにおけるリスナーシップ—会話の相互構築に向けた笑いの貢献—」

難波彩子

(エディンバラ大学大学院)

従来の談話研究は聞き手よりも話し手に焦点を置かれる傾向にあった。その傾向の中で聞き手と笑いの関係を詳細に探った研究はほとんどなされていない。

本研究の目的は、会話の相互構築に向けて笑いがどのようにリスナーシップとして貢献されるのか、そしてその貢献と日本語コミュニケーションの接点を明らかにすることである。

データは日本語母語話者による会話を使用した。23組の大学教員と大学生が「日常でびっくりしたこと」について会話をする様子を収録した。

分析では、談話分析の手法を用いることによって笑いのパターンと機能を特定する。ダイナミックな会話の流れの中でリスナーシップとしての笑いが機能し、その中で人間関係が創造され、高められ、維持されていく会話の柔軟な様子を明らかにする。さらに、会話の相互構築の過程で、笑いにおけるリスナーシップを通して会話参加者の社会的アイデンティティが垣間見られることを指摘する。

「言語行動の国際比較と異文化コミュニケーション理解」

川崎晶子 (立教大学)

グローバル化し、人の交流がますます盛んになっている現在、さまざまところで異文化コミュニケーションが行われている。それを円滑に行えるように、各言語の特徴的な言

語行動に関する情報が必要とされ、また、他言語の言語行動がわかりやすく理解できる記述方法が求められている。

本発表では、Anna Wieszicka の cultural scripts および universal semantic primes の発想と方法から学びながら、言語行動の特徴はどう記述できるかを考える。Cultural scripts は言語行動の国際比較に耐える普遍的記述方法であるが、その記述に使われる universal semantic primes の抽象度はしばしば実感を持った理解を難しくする。国際比較がしやすく、異文化コミュニケーションの現場で応用できるような理解しやすい記述方法を、英語と日本語の言語行動の具体的な例を分析しながら検討する。

[1] “Anglo scripts against ‘putting pressure’ on other people and their linguistic manifestations” in Cliff Goddard (ed.) *Ethnopragmatics*, Mouton.

第六室 (11月13日午前)

司会 鍋島弘治朗 (関西大学)

「定名詞を伴う英語所有文の3分類—日本語存在表現との対照から—」

大西美徳 (名古屋大学大学院)

英語の所有動詞 have による所有文は、英語 there 文同様、定性効果を示すと言われる。しかし、この例外、つまり定名詞を伴う have 文もあり、情報構造や情報提示の機能など、語用論的な説明が有力である。本発表ではまず、認知言語学の立場から、文脈から一義化された読みが3種類の意味に分類され、それぞれ主語と目的語の関係が、(i) 抽象的所有関係 (責任、義務など) を介した事実/虚構関係 (actual/ virtual: Langacker 2009: 94 [1])、(ii) 空間的場所関係、(iii) 属性関係のいずれかの関係概念として解釈されることを論じる。また日本語存在表現でも同じ解釈が対応することを示す。この分類から、(i)、(ii) は、定名詞が生じる場合に特殊な解釈が必要になる点で、定性効果を持つと考えてよい一方、(iii) は、定・不定による意味的対立がないので、定性効果を示さないと結論づける。

[1] *Investigations in Cognitive Grammar*.

Berlin/ NY: Mouton de Gruyter.

「構文イディオムにおける wits の 2 用法」

五十嵐海理 (龍谷大学)

吉川裕介 (佛教大学 (非常勤))

本発表では (1) で示す wits の交替現象と考えられる事例について、wits の語彙的な意味と機能を通して、どちらも [NP V NP out of NP] という形式で強意的な解釈であるが、異なった事象構造を有しており、解釈を得る過程に違いがある点を語彙意味論の立場から論証する。

(1) a. She scared the wits out of me.

b. She scared me out of my wits.

Jackendoff (1997 [1]) や Hoeksema & Napoli (2008 [2]) の主張とは異なり、(1a) の wits は意味が希薄化することで誇張の解釈を得ているのに対し、(1b) は、out of one's wits と誇張解釈をもつ結果句との平行性から、この種の結果構文と同じ解釈過程が関わると主張する。また body-part off 構文 (Espinal & Mateu 2010 [3]) との関連も言及する。

[1] *The Architecture of the Language Faculty*.
[2] “Just for the hell of it.” *JL*, 44. [3] “On classes of idioms and their interpretation.” *J. of Pragmatics*, 42.

司会 中谷健太郎 (甲南大学)

「部分構造 A of B と対比構造 A out of B」

田中秀毅 (広島女学院大学)

一般に「部分構造」と呼ばれる A of B (two of the books など) は、Jespersen (1949 [1]) で取り上げられ、その後 Jackendoff (1977 [2]) などから本格的な理論的研究が始まった。一方、本発表で「対比構造」と呼ぶ A out of B (two out of five books など) については、Quirk *et al.* (1985 [3]) が部分構造との差異について言及しているが、詳細な記述とは言いがたい。そこで本発表は、部分構造と対比構造の統語論的・意味論的特性を比較する。両構造は、A に生じる名詞が B に生じる名詞の一部を指すという意味機能を共有するけれども、A と B に生じる要素・表しうる意味関係は、両構造で完全には一致しない。本発表は、対比構

造の記述と部分構造と対比構造の意味特性の共通点にもとづく部分構造の細分化を試みる。

[1] *A Modern English Grammar*, VII. [2] *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press.
[3] *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

「機械翻訳精度向上をめざした接続詞 as の用法記述」

加藤敏三 (信州大学)

黒田 航 (早稲田大学 (非常勤))

接続詞 as の用法は、It is as good as this. のような<同等比較>、As I entered the room, I saw him eating. のような<同時>、As I didn't have enough money, I couldn't buy it. のような<理由>、He did as I said. のような<ように>の4つの用法がある。機械翻訳ソフトは、<同等比較>以外は適切に訳し分けることができない。しかし人間はこれら4つの用法を容易に区別できる。その際、人間は『文脈』から用法を判別していると考えられるが、その『文脈』が何であるかが解明されれば、機械翻訳の精度向上に直結することが見込まれる。本発表は、機械翻訳の向上を通して、意味論・言語学が社会貢献することをめざしたものである。

<同等比較>では一つめの as が用法識別キューであり、それは自明であろう。本発表では、その他の3用法では、それぞれ、「際立つ動きがある」「際立つ動きがない」「空所がある」が識別キューであり、これらが『文脈』の具体的内容であることを、事例とその分析を通して論証する。

第七室 (11月13日午前)

司会 新沼史和 (盛岡大学)

“Two Types of VP Ellipsis”

佐藤元樹 (東北大学大学院)

本発表では、Merchant (2001 [1]) が提案した PF 削除を認可する素性[E]が随意的にフェイズ主要部に導入されると提案する。Merchant (2001) は、C に生起する素性[E] がその補部である TP を削除し、間接疑問縮約を派生する分析を提示している。本発表では、

Chomsky (2008 [2]) で提唱された素性継承のメカニズムから、フェイズ主要部 C に導入された素性[E] が T に継承される可能性、また素性[E] が他のフェイズ主要部である v に導入される可能性について論じ、これまで動詞句削除と考えられてきたものには、CP フェイズ領域で認可される動詞句削除 (vP Deletion) と vP フェイズ領域で認可される動詞句削除 (VP Deletion) の二種類が存在することを示す。

また、本分析から動詞句削除に観察される繰り上げ述語とコントロール不定詞節における容認度の対比や遊離数数量詞の生起可能性等、動詞句削除に関する広範囲にわたる特徴を説明できることを示す。

[1] Merchant (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Island, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford. [2] “On Phases.”

“Linearization and Boundedness of Movement”

北田伸一 (東北大学大学院)

本発表の目的は、生成文法の極小主義プログラムの枠組みで新たな線形化理論を提案し、その帰結として英語の左方移動と右方移動の有界性に関する非対称性を説明することである。本発表では、フェーズ投射内の語順は線形対応公理 (LCA) により決定されるのに対し、非フェーズ投射内の語順は主要部パラメータにより決定されると提案する。まず LCA により、フェーズ端への移動は左方移動となる。更に、この位置は Chomsky (2000 [1]) のフェーズ不可侵条件 (PIC) により外部操作に対して可視的なため、左方移動は連続循環的に移動できる。一方、非フェーズの VP 内語順は、主要部先端の選択肢により V が VP 内の左端に生起する。つまり、VP 内で要素が移動するとき、この要素は VP の右端に右方移動する。VP は PIC から外部操作に不可視的なため、VP を越えて右方移動できない。本分析を Wh 移動、外置、重名詞句移動に基づいて論証する。

[1] “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step*, ed. by R. Martin et al., 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

司会 島 越郎 (東北大学)

「空移動仮説再考」

坂本暁彦 (筑波大学大学院)

「移動操作が空適用であってはならない」とする空移動仮説 (VMH) (George (1980)) は、主語を v*P 指定部に基底生成させ、素性照合による TP 指定部への空移動を求める動詞句内主語仮説 (VPISH) (cf. Fukui and Speas (1986), Kitagawa (1986), Kuroda (1988), etc.) との間に矛盾を生み出す。先行研究では、VMH を、Wh 主語の TP 指定部から CP 指定部への移動に関する議論の中でしばしば定式化してきたが (cf. Abe and Hornstein (2010), Agbayani (2000, 2006), Chomsky (1986: 48-54 [1]), etc.)、上述の矛盾を解決しようという試みはこれまでなされてこなかった。本発表では、素性継承理論 (Chomsky (2008 [2])) に基づき既存の VMH を再定式化することでこの矛盾を解決したい。また、再定式化された VMH がいかなる帰結をもたらすのかについても併せて考えることにする。

[1] *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA. [2] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

“Derivations within a Phase: Step by Step or All at Once?”

水口 学 (長野工業高等専門学校)

This paper explores the process of syntactic derivations within a phase and discusses its consequences for minimalist theorizing. Based on the analysis of extraction from subjects, we claim that derivational computation proceeds step by step within a phase, arguing against simultaneous, parallel applications of operations. We show that the proposed derivation can also explain the lack of subject condition effects in some languages, and is endorsed by multiple *wh*-questions. We argue that two consequences follow from our claim: (i) grammatical extraction from subjects does not involve movement but adjunction, and (ii) the subject *wh*-phrase does not move to [Spec, CP] and [Spec, TP] simultaneously from within v*P/vP.

We show that these consequences are theoretically desirable and empirically corroborated. To the extent that our claim is on the right track, it strengthens the argument that step-by-step procedures explain language.

第八室 (11月13日午前)

司会 大名 力 (名古屋大学)

「アブダクションに基づいた「の(だ)」文に関する日英比較」

五十嵐啓太 (筑波大学大学院)

従来の「の(だ)」文(e.g. 本を買ったのだ。)に関する日英比較では、it is that 構文 (e.g. It is that I've caught a cold.) といった構文との対応関係を求めることが前提となっていた (cf. 大竹 (2009 [1])). しかしこうした日英比較研究では捉えることができない事実がいくつか存在する。本発表ではそうした事実を説明するために、まず、「の(だ)」文の「の」はアブダクション (仮説形成) という推論過程が当該談話において関与することを示すマーカであるという仮説を提案する。その上で、日本語はアブダクションの言語的明示が義務的だが、英語は義務的でないことを明らかにする。さらに、従来、「の(だ)」文とそれに対応するとされてきた it is that 構文はアブダクションを明示する言語的手段という点では共通するが、指定文か否かという違いから使用上の相違が生じ、そのため両構文は完全に一致するものでないことを論じる。

[1] 『「の(だ)」に対応する英語の構文』くろしお出版。

「否定辞付き話題化構文の特異性—文断片からの動的・機能的分析—」

天沼 実 (宇都宮大学)

(1B) のような否定辞付きの話題化構文 (Not-topicalization (Culicover (1999 [1])) は複数の否定辞が表出しているながらも (2) と同値の単純な否定になる。

(1) A: They'll find me.

B: Not in this disguise they won't.

(2) They won't (find you) in this disguise.

ある種の negative concord と話題化が共起しているように見えるこの構文には、このような特殊な否定辞の生起以外にも多くの特異性がある。本発表では、動的文法理論 ([2] 等) の枠組みに立脚した文法展開の一般法則と、より早い段階で習得・使用されていると思われる (3B) のような照応的否定辞とその焦点句からなる文断片の統語的、談話機能的特徴に基づいた分析を提示する。

(3) A: Please let us in.

B: Not without tickets.

本研究で示す動的なアプローチが当構文の特異な属性の説明と「可能な文法」の概念の絞り込みの両立に有効であることを論じ、Progovac et al. (2006 [3]) をはじめとする文構造と文断片の関係を巡る議論に新たな視点を提供したい。

[1] *Syntactic Nuts*, OUP. [2] 梶田優「<周辺><例外>は周辺・例外か」『日本語文法』4.

[3] *The Syntax of Nonsententials*, Benjamins.

司会 上田由紀子 (秋田大学)

“On the Movement-and-Deletion Analysis of English Stripping” (E)

Chizuru Nakao (Daito Bunka University)

This presentation considers the stripping construction in English (e.g. “John ate an apple, but not an orange.”). Adopting some traditional evidence for the movement-and-deletion analysis of sluicing, such as the Case-matching phenomenon and the P-stranding generalization, I will support the view where stripping is derived via focus movement and IP-deletion ([1], a.o.), and that negation in stripping is base-generated in a sentence-initial position in the same way as the negative inversion environments. The fact that negation in stripping does not actually induce inversion will be explained in the same way as [2]'s analysis of the lack of SAI in sluicing. I will also give some counterarguments to two other analyses of stripping. The analysis where stripping involves covert rightward QR and the analysis where the stripped phrase consists a ‘discontinuous constituent’ are both incompatible with the possibility of long-distance stripping.

[1] Depiante, M. (2000) *The Syntax of Deep and Surface Anaphora*, Doctoral dissertation, UConn, Storrs. [2] Lasnik, H. (2001) "When Can You Save a Structure by Destroying It?," *NELS* 31.

「項と付加詞の区別について: do so 構文における文法性の揺れから見えること」

八木孝夫 (東京学芸大学)

項と付加詞は、構造上、主要部のまわりにもどのように配置され、それを決定する原理は何か? 意味と統語構造の対応に関するこの基本的な問題の論考において do so 構文は重要な証拠として使われてきたが、資料を丹念に調べると、do so の外に項を置くことはできないという定説は必ずしも正しくなく、この点に関する個人差の存在を認める必要があると結論できる。では、当該の個人差はどのような場合に可能で、また、それを許すためには個別文法にどのような記述能力を認めるべきなのか? その問いに対し、厳密下位範疇化素性と Jackendoff の PP-Adjunct Rule との関係に基づく基本的な回答を与えると共に、項と付加詞をめぐる従来の説の問題点を吟味する。その際、程度修飾に関わる、これまでほとんど注目されることになかった幾つかの事象を取り上げ、項と付加詞の配置に関する未解明の問題を指摘し、解決の方向性を示す。

[1] Culicover and Jackendoff, *Simpler Syntax*.

[2] Jackendoff, *Semantic Structures*. [3] Randall (2010) *Linking*. [4] 八木 (2009) 「Do So 構文と Goal 表現」『英学論考』38.

第九室 (11月13日午前)

司会 菅原真理子 (同志社大学)

「最適性理論と where S V? の発達」

深谷修代 (津田塾大学 (非常勤))

本発表は、CHILDES に収録された Adam の where-疑問文を縦断的に分析し、初期に特徴的な where S V? に焦点を当てる。where S V? は、2歳後半で減少し、3歳で再び増加していることから、2;3-2;9 と 3;0-3;6 の2つの時期に分けて分析する。その結果、両時期とも動詞 go の使用頻度が高く、go の原形は第1期では108

例中99例 (Where it go?), 第2期では86例中28例観察された。このことに関して、カイ二乗検定による独立性の検定を行い、有意差が認められ、発達時期と go 原形の有無に関連があることを証明する。さらに最適性理論を用いた分析では、制約の相互作用に焦点を当て、「潜在的相互作用」と「活性相互作用」に分類する必要があると主張する。そして、言語発達では制約の相互作用の活性化が重要であり、潜在的相互作用にある制約との関係を活性化させることにより、当該制約が機能できるようになると提案する。その結果、第1期では VP、第2期では IP の構造が最適候補として選ばれることを提示する。

[1] McCarthy, John J. (2002) *A Thematic Guide to Optimality Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.

「音韻障害の臨床分析にかかわる問題点」

上田 功 (大阪大学)

最適性理論の台頭に伴い、音韻獲得や獲得期の構音障害の分析では、制約とそのランキングが議論の中心となっている。本発表では、言語聴覚士が、実際に構音障害児の多種多様な音韻体系を分析する際の、現実的な問題点を論ずる。最初に、正常音の獲得には、語彙拡散的に正しい音を獲得するタイプが存在するので、最適性理論では特に矮小化された感がある入力表示に関して [1]、もう少しその獲得の有無を疑ってみる必要があることを主張する。次に、正しい入力が獲得されている場合でも、誤構音を引き起こす制約の性格をもっと考慮すべきであることを論ずる。臨床的には、正しい音が獲得されるためには、それを具現化する忠実性制約にフォーカスが当てられることが多いが、それをはばむ有標性制約の性格については、踏み込んだ検討はあまりなされておらず [2]、今後の臨床評価・治療には、この点が重要であることを主張する。

[1] Smolensky, P. (1996) "On the comprehension/ production dilemma in child language" *LI*. [2] Dinnsen, D. and J. Gierut (2008) *Optimality Theory, Phonological Acquisition and Disorders*, Equinox.

司会 新沼史和 (盛岡大学)

“Uninterpretable Features and the Immobility of Constituents”

荒野章彦 (東北大学大学院)

Chomsky (2008 [1]) のフェイズ・システムの下では、解釈不可能素性が値を付与されると解釈可能素性と区別がつかなくなる。この解釈不可能素性は、LF インターフェースに転送 (Transfer) されると完全解釈の原理違反を引き起こす。従って、二種類の素性を区別し、解釈可能素性のみを LF インターフェースに転送するために、(1) 解釈不可能素性の値付与と転送が同時に起こらなければならない。Richards (2007 [2]) は、(1) の帰結として、解釈不可能素性を転送領域へと送る素性継承 (feature inheritance) の適用が義務的であることを示した。

本発表では、解釈不可能素性を含む構成素が転送領域を越えて移動した場合も、(1) の違反が起こるため、非文法的となると主張する。この主張から、フェイズ補部の移動不可能性、繰り上げ述語とコントロール述語の前置の適用可能性等を説明できることを示し、(1) を支持する新たな証拠を提示する。

[1] “On Phases.” [2] “On Feature Inheritance: An Argument from the Phase Impenetrability Condition,” *LI* 38.

“Optionality of Agree-Feature Inheritance in English”

田口茂樹 (信州大学)

This paper argues that Agree-feature inheritance from v to V proposed in Chomsky (2008 [1]) can be optional. Based on whether or not object shift applies (Bošković 2002 [2]), I demonstrate that the Agree-feature inheritance optionally applies in direct object contexts, but never applies in the Exceptional Case-marking (ECM) contexts; if the Agree-feature inheritance from v to V applies, the direct object does not move at all, checking its Case-feature against the Agree-feature of v in a head-complement configuration, while if it does not, the direct object

moves to Spec v P, checking its Case-feature against the Agree-feature of v in a Spec-head configuration. I propose that this optionality is attributed to whether or not V directly θ -mark the accusative NPs. I further show that the proposal opens up the possibility of the Case licensing and accompanying movement of NPs in A' -positions.

[1] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, Robert Freidin, Carlos Peregrín Otero, and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), Cambridge, MA.: MIT Press, 133-166. [2] “A-Movement and the EPP,” *Syntax* 5, 167-218.

第十室 (11月13日午前)

司会 中西公子 (お茶の水女子大学)

「日英語の擬態語・擬音語について」

長谷部郁子 (筑波大学 (非常勤))

本発表で取り扱うのは、日英語における、「あくせく(する)」や *toil* といった擬態語と、「わんわん」や *bow-wow* といった擬音語である。本発表では、語彙意味論の立場から、擬態語が、クオリア構造 (Pustejovsky (1995) [1]) の情報の一部が語彙概念構造に写像されることによって形成されるのに対し、擬音語は、クオリア構造における合成操作によって形成されると主張し、このように考えることで、擬態語と擬音語の様々な統語的または形態的なふるまいの差異を説明する。また、日英語の擬態語と擬音語の形成方法や概念構造の違いについても議論し、日本語は英語に比べ、擬態語や擬音語に相当する表現が豊かであることについて言及し (田守 (2010) [2] も参照)、なぜそのようなのかを考察する。さらに、擬態語と擬音語の統語構造についても議論する。

[1] *The Generative Lexicon*, MIT Press. [2] 「「ぴかっと光る」と「びかびか光る」は英語でどう表わされるか?」『英語教育』9月号, 12-13, 大修館書店。

「前置詞句による名詞前位修飾について」

西牧和也 (筑波大学大学院)

前置詞句は名詞を通常後方から修飾するが、*in-city headquarters* という例もある。このような前置詞句の前位修飾が可能になる場合とならない場合の相違について、Shimamura (1986 [1]) などの先行研究では、前置詞句それ自体の意味や形式から説明しようとしているが、十分ではない。このような分析の問題点は、名詞前位修飾に特有の意味機能が考慮されていない点にあると思われる。Bolinger (1967 [2]) などは、名詞前位修飾が特有にもつ意味機能として、名詞に対する特徴付け・分類的機能を指摘している。本発表では、前置詞句が前位修飾に関わる場合にも同様の意味機能条件が満たされなければならないことを指摘する。更に、当該前置詞句が語彙化という過程を経ていることから、語彙化条件の一つになっていることも示す。

[1] Shimamura, R. (1986) "Lexicalization of Syntactic Phrases," *EL* 3. [2] Bolinger, D. (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18.

司会 藤井洋子 (日本女子大学)

「ナラティブにおける語り手の視点」

川副理美 (日本女子大学大学院)

ある出来事を描写する際に語り手がとる視点の日英語の違いについては、これまでも幾つかの知見が得られている。例えば本多 (2005 [1]) は、日本語は登場するキャラクターの視点、英語は全知の神の立場から語りを展開する傾向があると述べ、池上 (2006 [2]) は川端康成の「雪国」の英訳が列車の中の乗客の視点ではなく、列車を外から見下ろしているかのような視点で語られており、原文と語りの視点が異なると述べている。これらの知見は、小説等の書きことばの分析により得られたものである。そこで本研究では、日英語の比較可能なナラティブをデータとする。

本研究では日本語話者の「あげる」等の deictic 表現、英語話者の「he」等の代名詞表現、さらにナラティブの語り始めや語り終わりに着目し、日本語母語話者が登場するキャラク

ターの視点に立ったり、語り手自身の視点に立ったりと視点に流動性があるのに対し、英語母語話者は語り手の視点に一貫性があることを明らかにしたい。

[1] 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』。 [2] 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚、日本語の感覚』。

“The role of poetic performance in the creation of socio-cultural space: The case of small talk in American society” (E)

Risako Ide (University of Tsukuba)

In this paper, I analyze speech play and interactional humor as achieved through small talk among strangers in public places. Perceiving small talk as an interactional locus through which cultural pragmatics emerge, I pay attention to the functions of poetic performances, particularly that of repetition and parallelism that emerge out of public interaction among strangers. Describing the manners in which poetic performances drive the interaction towards a coordinated direction, I demonstrate the pragmatic functions of poetic performances in English everyday interaction. I also point out the metapragmatic functions of repetition and parallelism which not only create a playful and poetic effect within the stretch of interaction, but also mark the boundaries of the discursive event, while evoking and indexing a certain cultural space.

[1] Bauman, R. 1986. *Story, Performance, and Event*. Cambridge: Cambridge University Press. [2] Norrick, R. N. and D. Chiaro, eds., 2009. *Humor in Interaction*. Amsterdam: John Benjamins Publications.

〈シンポジウム〉

A 室 (11月12日午後)

「日英語比較研究の可能性—その社会的応用をめぐる—」

司会 井出祥子 (日本女子大学)

東日本大震災は、皆がそれぞれに自分ほどのようにして世の中に役立てるかを問う機会

となった。英語学会の研究者達は、基礎研究からその応用研究にいたるまで、それぞれの立ち位置で仲間と独自の研究領域を作り、その中で切磋琢磨してきた。しかし、研究を世の中に役立たせるには、研究者達が領域横断的に共生・協働し、社会貢献に向けて話し合うことが有効であろう。

本シンポジウムは、英語学がどのように社会に貢献できるかを巡って、文法論、語用論、談話研究の研究者達がディスカッションを繰り返し広げる。英語を対象に研究することは、私達の母語である日本語との比較が暗黙の前提となる。そこで、共通テーマは「日英語比較研究」とした。

一般の聴衆を想定した公開シンポジウムである。ディスカッションの時間を多く取り、講師間で、次に一般の聴衆との間で話し合い、その結果、共創的にアイデアが生まれるようなシンポジウムになることを願っている。

「談話の文法 ― 「談話的言語」を可能にする文法システム」

講師 斎藤 衛 (南山大学)

日本語は、しばしば、英語と比較して「談話的」と言われます。その場合、豊富な終助詞とその多用、文法規則の存在すら疑わせるほどの省略などが念頭に置かれているのでしょうか。しかし、言語使用も文法に依存しますので、日本語が談話的な性質を有するとすれば、それを可能にする文法システムをもっている筈です。本発表では、間接引用の形と項の省略に焦点をあてて、日本語の文法が、先行する発話などの「文脈」を文の文法に取り込むシステムをもつことを論じます。このシステムは、日英語の相違に部分的な説明を与えますが、Susan Plann (1982 [1]) や Serkan Sener and Daiko Takahashi (2010 [2]) に言及しつつ、この文法システムが日本語特有のものではなく、人間言語において広く観察されるものであることも示します。

[1] “Indirect Questions in Spanish,” *Linguistic Inquiry* 13. [2] “Argument Ellipsis in Japanese and Turkish,” *MIT Working Papers in Linguistics* 61.

「制度的談話分析の可能性:日本人留学生のアカデミック談話事例を中心に」

講師 平賀正子 (立教大学)

国際化する今日の大学におけるアカデミック談話の事例分析を通して、教育文化の前提やイデオロギーがどのように談話内に具現化されており、留学という文化接触場面ではそれがどのようなコミュニケーション上の問題として浮かび上がるのかについて、異文化語用論という観点から論ずる。

本発表では、談話データの異文化比較を行う際のデータ収集の方法として制度的談話を提案すると同時に、事例を通して制度的談話そのものが、どのように社会文化を反映しているのかを考察することにより、制度的談話分析が果たす社会的貢献について掘り下げたい。

留学準備教育や学業のための英語教育はもとより、異文化間交流や交渉、相互理解の促進や誤解の回避など、より一般的な応用の可能性へとつなげたい。

「職場の談話研究から社会貢献について考える」

講師 村田和代 (龍谷大学)

本発表では、比較談話研究(やりとりの社会言語学)の中でも比較的新しい分野である職場談話(workplace discourse)の研究をとりあげ、研究の社会貢献への可能性について考える。

①職場談話の研究手法と研究倫理について、②職場談話の実証的研究として国際的にも有名な Language in the Workplace Project (Victoria University of Wellington, NZ)の概要及びこの研究プロジェクトの社会貢献について、③日本及びニュージーランドのビジネスミーティングに見られる言語の対人関係機能面に関する比較文化研究におけるイーミック・アプローチの重要性とその学問的及び社会的意義、④職場の談話研究の社会貢献の可能性、といった流れで話題を提供し、他のパネラーや会場のみなさんと意見交換を行いたい。

「英語学会にとって社会貢献とは？」

講師 影山太郎 (国立国語研究所)

研究者が自分の城に閉じこもって論文を書

いているだけの時代は終わった。大学でも企業でも、社会連携、社会貢献、社会責任等々の言葉で表されるような、広く社会に開かれた存在であることが強く求められている現在、学会はどのような役割を果たすべきだろうか。通常、「社会」という言葉からは学术界に対する一般社会 (the general public) を思い浮かべるが、しかし学会も“society”である。平時において、更には大災害のような非常時において、私たち日本英語学会は一般社会に対して、そして国内外の研究者社会(学会)に対して、どのような活動ができるだろうか？ 各種の事例を挙げながら、みなさんと一緒に考えてみたい。

B 室 (11 月 13 日午後)

「統語と音韻のインタフェイス」

司会 時崎久夫 (札幌大学)

ミニマリスト・プログラムに基づく目下の生成文法研究では、統語構造の音韻部門における線形化とインタフェイス条件の解明が主要な研究課題となっている。本シンポジウムは、4人の講師が最新の研究成果を発表することにより、この問題に理論的・経験的な進展をもたらすことを目指す。

扱うトピックは、ラベルのない句構造とフェイズごとの循環的派生による線形化、韻律範疇とその階層、話題と音調句、韻律の自律性、インドネシア語の能動マーカーによる *vP* フェイズの証拠、統語派生後の語彙挿入の破綻としての「削除」、語順・複合語・前置詞残留・*wh* 移動などの統語パラメーターの強勢・音調などの音韻パラメーターへの還元などである。

シンポジウムに関する詳しい情報は次のサイトに掲載する予定である。

<http://blog.livedoor.jp/interface2011/>

“Phasing in Linearization of Unlabeled Phrase Structure”

講師 成田広樹 (早稲田大学高等研究所)

Since representation of labels is an unwarranted departure from the desideratum of bare phrase structure, it is commendable that a growing body of literature provides various

refinements of syntactic theory that makes little-to-no recourse to labels/projections (Collins 2002; Chomsky 2008; Narita 2011 *a.o.*). Building on this move, this talk will cast doubt on the dominant assumption, shared by traditional directionality-parameter, various versions of Kayne’s LCA, Fukui & Takano’s theory of Demerge, etc., that the mechanism of linearization requires labeled input. An alternative label-free theory of linearization is proposed, which takes the cyclicity of phase-by-phase derivation as its necessary component.

“Deriving the Prosodic Hierarchy”

講師 土橋善仁 (新潟大学)

The Prosodic Hierarchy is one of the central notions in the study of prosody. It is a representational schema that stipulates the organization of prosodic constituents. In this study, I propose that each of the prosodic constituents should be recast as a linguistic level that is derived in the syntax-phonology mapping. That is, terminal elements in syntax are mapped to the linguistic level where prosodic words are linearly ordered, and this level is mapped to the level of phonological phrase, which in turn is mapped to the level of intonational phrase. I show that this derivational approach, coupled with a general condition that the mapping in the interface is local, gives a principled account of how the prosodic constituents are organized, why a topic coincides with an intonational (but not, say, phonological) phrase, and how autonomous prosody is.

“Successive Cyclicity at the Syntax-Phonology Interface: Voices from Standard Indonesian”

講師 佐藤陽介 (シンガポール国立大学)

One of the central hypotheses within generative grammar is successive cyclicity. This hypothesis is a crucial design feature of the syntactic computation within Phase Theory (Chomsky 2000 et seq.). This paper presents new evidence for this hypothesis from the distribution of the active voice/AV marker *meN-* in Standard Indonesian. In this language, the movement of an

NP across an active verb deletes the AV morpheme from the verb. I propose that the movement of an NP causes a change in the feature content of v^* and that this change, in turn, blocks the insertion of the otherwise obligatory AV morpheme under v^* in the post-syntactic morphological component. The data discussed here provide support for vP phases at the syntax-phonology interface and yields a new understanding of the “deletion” of derivational morphemes as failure of the post-syntactic vocabulary insertion (Harley 2005).

“Universal Syntax and Parametric Phonology”

講師 時崎久夫 (札幌大学)

The minimalist program claims that conditions are on the interface between syntax and sensorimotor (SM) system and conceptual-intentional (C-I) system (i.e. bare output conditions). In order to pursue this idea, we need to reconsider the status of the syntactic parameters proposed so far. In this paper, I propose a hypothesis that parameters are only in phonology while morphosyntax is universal. This hypothesis, Universal Syntax and Parametric Phonology, claims that apparent morphosyntactic variation in the world’s languages can be attributed to interface conditions on movement. I discuss parameters such as head-directionality, compounding, preposition stranding and wh-movement. It is shown that these morphosyntactic properties are derived from word-stress location and tone/pitch features together with interface conditions on movement. I argue that restricting parameters within phonology has a number of desirable consequences for theories of languages including language acquisition and language change.

C室 (11月13日午後)

「言語と言語の接点から見る言語知識の普遍性と個別性」

司会 窪蘭晴夫 (国立国語研究所)

本シンポジウムでは「言語と言語が接触した際にどのような現象が現れ、そこからどのよ

うな普遍性や個別性が見えてくるか」という問題を、(i) 借用語研究、(ii) 言語・方言接触、(iii) 第二言語習得、(iv) バイリンガリズムの4つの視点から考察する。統語論や音韻論、語彙論などの部門を超えたシンポジウムとして、特定理論の個別問題を論じることは極力避け、具体的な言語事実を紹介しながら言語の普遍性と個別性を議論したい。

「借用語に見られる普遍性と個別性」

講師 窪蘭晴夫 (国立国語研究所)

言語と言語が接触する一つのケースとして、日本語の借用語を取り上げる。具体的には、日本語が他の言語 (特に英語) から語を借用する際に外来語の音韻構造が何によって決定されるのか、とりわけ L1 である日本語の音韻構造がどの程度関与し、また L1 の制約とは別に普遍的な原理・構造が働いているのか、これらの問題を考察する。借用語のアクセントについては L1 のアクセント体系・構造と知覚印象が決定的な役割を果たしており、普遍的な原理が働いているとは認められない [1]。面白いことに、この過程で働く知覚と L1 の制約は、標準語と接触する際に方言に生じるアクセントの変化をも決定づけている [2, 3]。

[1] Kubozono, H. 2006. Where does loanword prosody come from? *Lingua* 116: 1140-1170. [2] Kubozono, H. 2007. Tonal change in language contact. *Tones and Times 1*, 323-351. Mouton de Gruyter. [3] Kubozono, H. 2010. Japanese pitch accent. *The Blackwell Companion to Phonology*. 5: 2879-2907. Wiley-Blackwell.

「言語接触に見られる普遍性と個別性」

講師 ダニエル・ロング (首都大学東京)

継続的に調査している小笠原諸島欧米系島民のことばの分析をもとに、言語接触における「普遍性」と「個別性」を考察する。彼らは小笠原のコイナー日本語と小笠原クレオロイド英語の「絡み合い」によって形成された「混合言語」を使う。起点言語で区別される英語起源の単数形・複数形および不・定冠詞、さらには日本語の多数の人称代名詞 (me/me ら、you/you らに統一) の区別が失われてい

る。同じような単純化が多くの接触変種（世界多くの英語ピジン、海外の日系移民の日本語変種）に見られるので一種の「普遍性」と言えよう。一方、小笠原の混合言語（の英語起源部分）は一般の接触変種に見られる5母音体系ではなく、ネーティブ変種に見られる10母音である。更に、19世紀に世界の他の英語変種から姿を消した NORTH/FORCE の音素弁別や/v/の中の[v]と[w]の相補分布が、言語接触が起きたにも関わらず、保持されている。これらの特徴に小笠原混合言語の「個別性」が見られる。

「第二言語獲得における普遍性と個別性」

講師 遊佐典昭（宮城学院女子大学）

人がことばを産出して理解できるのは、脳内にこれを可能とする言語知識が実在しているからである。第二言語使用者の脳には、母語知識と第二言語知識が共存し、お互いに影響を及ぼしあうことが知られている [1]。本発表では、外国語としての英語環境(English as a foreign Language, EFL)にいる日本人英語使用者の言語使用を、普遍性と個別性の観点から議論する。具体的には、第二言語が母語に与える影響として、有声音開始時間(voice onset time, VOT)を手がかりに英語学習初期のデータを考察する。また、日本人英語使用者がおかす誤りをいくつかとりあげて、その原因が日本語からの転移による個別性なのか、あるいは普遍性を持つのかを考察する [2]。最後に、人間言語の普遍的な特徴である「構造依存性の原理」が、第二言語使用でも機能することを示す予定である [3]。

[1] Jarvis and Pavlenko (2004) *Cross-linguistic Influence in Language and Cognition*. [2] 遊佐 (2010) 「第二言語獲得」『言語と哲学・心理学』 [3] Yusa et al. (2011) “Second Language Instinct and Instruction Effects: Nature and Nurture in Second Language Acquisition.” *Journal of Cognitive Neuroscience*.

「同時バイリンガリズムに見られる

普遍性と個別性」

講師 松岡和美（慶應義塾大学）

講師 森（三品）聡美（立教大学）

同時バイリンガルとは、出生時から複数の言語を母語として育った二言語話者を指す。近年の同時バイリンガリズム研究においては、2つの言語システムが独立して発達するものの、一定の言語間相互作用が見られるとされている (Muller and Hulk 2001 他)。バイリンガル児の発話において、言語間作用が普遍的に起きやすいと考えられているのは、例えば項の出現と脱落や reference choice など、特に複数のモジュールが関わる言語現象である。その一方で、言語間相互作用の有無が言語の類型的距離に影響されることも指摘されている。本発表では日英バイリンガル児の主語の使用の分析結果を用いて (Mishina-Mori 2007, Matsuoka et al.2008, Matsuoka et al.2011)、同時バイリンガリズムを個人の中での言語接触の一例としてとらえ、言語間相互作用に見られる普遍性と個別性について考察する。

D 室 (11 月 13 日午後)

「生物言語学・進化言語学の新しい流れ」

司会 池内正幸（津田塾大学）

近年富に隆盛を極めていると見られる生物言語学・進化言語学研究は、ここ数年一層の活性化と質的・量的な統合へ向けての新しい時代に入ったと考えられる。

そのような背景の下で、本シンポジウムは、ヒトのことばの起源と進化に焦点を当て、神経学、脳科学、人類学、モデリング等々の諸分野の視点から、導入をも含めて、生物言語学・進化言語学の最近の成果、動向、今後の見通しについて、検討・議論する。

具体的には、二つの keynote speech（藤田講師、岡ノ谷講師）の後、討論者を加えて討論会を行う。メンバーを<言語チーム>と<生物・モデリングチーム>に分け、進化言語学の目指すところ・研究法、(前/外) 適応、ヒトの進化との関わり等々の問題について議論を戦わす予定である。最後に、2012年3月の Evolang 9 (Kyoto)の展望について語る [1]、[2]、[3]。

[1] 池内 (2010) 『ひとのことばの起源と進化』。 [2] Fitch, T. (2010) *The Evolution of Language*. [3] 藤田・岡ノ谷 (編) (2011) 『進

化言語学の構築』。

「言語進化の内と外」

講師 藤田耕司 (京都大学)

生物言語学・進化言語学も確固たる文法モデルに基づいて推進されるべきものであり、またこれによって当該モデルの進化的妥当性を問うことが可能になる。本発表では、Mergeを人間言語に唯一の生成エンジンとするMPの立場から、語形成はシンタクスで行われ、レキシコンは存在しないとする反語彙主義が、言語進化研究にとってどのような方法論的・経験的メリットをもたらすかを解説し、今後の研究の方向づけを行う [1,2]。またあらゆる生物進化の例と同様、言語進化にも、個体内部の内的要因とそれを取り巻く外的要因の双方が関与する。内在主義に立つ生成生物言語学では従来、後者への配慮が不十分であったが、言語を構成する諸機能の起源・進化の理解には人類進化のあらゆる側面の検討が必要となる。後半では、特に外適応や収斂進化、心・脳のモジュール進化の問題に焦点をあて、全体討論のための問題提起を行う。

[1] Fujita, K. (2009) *Biolinguistics* 3(2-3). [2] Piattelli-Palmarini, M. (2010) In R. Larson et al. eds. *The Evolution of Human Language*. CUP.

「言語進化研究を生物学にするには」

講師 岡ノ谷一夫 (東京大学)

人間の特殊性を生物学的な連続性として捉え直すことが、この分野に必要な。特殊性を非連続性として捉え続ける限り、発展はない。言語を生物学的な属性のひとつと考え、その起源と進化を研究するにはどうしたらよいか。私の提案する方略は以下のとおりである[1]。①言語そのものは唯一人間のみにも備わった属性であるが、言語を可能にした下位機能の一部は人間以前の生物と人間とで共通したものであると考え、それら下位機能を選定する。②それぞれの下位機能が実現される神経系とその進化機構について、さまざまな動物種で比較検討する。③得られた事実をどう統合していけば言語としての性質が創発するかを、モデル構成により検討する。伝統的には、①は言語学、心理学と動物行動学、②は神経科

学と進化生態学、③は構成論が扱う範囲であるため、他分野への理解に積極的な専門家集団が協力して研究を進める必要がある[2]。もはや、文系だ理系だなどと言っている場合ではない。

[1] Okanoya, K. (2007). *Cur Opin Neurobiol* 17, 271-276. [2] Berwick, Okanoya, et al. (2011). *Tr Cog Sci* 15, 113-121.

討論会の構成 (司会 池内正幸)

<言語チーム>

藤田耕司、萩原裕子 (首都大学東京)、池内正幸

<生物・モデリングチーム>

岡ノ谷一夫 [神経生態学]、内田亮子 (早稲田大学) [生物人類学]、橋本 敬 (北陸先端科学技術大学院大学) [複雑系・知識科学]

参考文献: Hagiwara, H. et al. (2007) "A Topographical Study on the Event-related Potential Correlates of Scrambled Word Order in Japanese Complex Sentences," *Journal of Cognitive Neuroscience* 19, 175-193. / 内田亮子 (2010) 「不都合な言語—その起源と進化」『認知神経科学』12(1), 9-15. / Hashimoto, T. et al. (2010) "Linguistic Analogy for Creativity and Origin of Language," *Evolang* 8, 184-191.

E室 (11月13日午後)

「(間) 主観性の諸相」

司会 中村芳久 (金沢大学)

本シンポジウムでは、今日さまざまに論じられている(間)主観性の議論を総括する一方で、とりわけ言語理論と直結する問題点の所在を明らかにし、(間)主観性についてのより本質的な理解に到達したい。Langackerの視点構図は観る・観られ関係を標準としてよいのかどうか、Traugottの(間)主観性は一群の表現に対する単なるラベル付けであって、認知的な深い洞察が欠如しているのではないか、主客合一あるいは主客未分の認知とは認知科学的にはどういうものなのか、等々論ずべき問題は多い。Langacker(2008: 8-9)によると、包括的な機能的文法理論は、あらゆる言語のあらゆる構文の構造記述が可能で、かつ

類型論的に言語特有の構文ネットワークを示すことができ、さらにそのような構文ネットワークの機能的・認知的構成原理を提示するもの、ということである。おそらく最終的には(間)主観性がこの点にどのようどの程度関与しているかを示す必要があるだろう。

「認知文法における主観性構図の検討」

講師 野村益寛 (北海道大学)

ラネカーの主観性の構図は、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』の中で視野は決してこういう形をしていないとした図とよく似ている。だからといって、ラネカーの構図がナイーブだということには必ずしもならない。我々にとっては「主観性」をどう考えれば言語現象をよりよく説明できるかが問題だからである。

さて、池上 (2000)は日本語における主語の省略という現象を「主観的把握」の現れと分析している。他方、Langacker (2008:468)では、(I) don't trust him.と主語を省略した場合、省略された話し手は immediate scope (=onstage)には位置しないが、objective content (OC)を構成するとされる。onstage の要素が object of conception であり、OC が object of description と定義されることを考えると、省略された話し手は、概念化の対象ではないが、描写の対象であることになる。ラネカーはなぜこのような不可解な分析をせざるを得なかったのか?本発表では、物語論における focalization という考え方を参考にし、認知文法における主観性の構図の検討を試みる。

「Subjectification を三項関係から見直す」

講師 本多 啓 (神戸市外国語大学)

本発表では Langacker の主体化と Traugott の主観化の関係を発達心理学でいう共同注意ないし「三項関係」(浜田 (1999 [1])) との関連で捉え直すことを試みる。まず Langacker と Traugott の subjectivity の関係に触れた代表的な研究である De Smet and Verstraete (2006 [2]) を批判的に検討する。そして両者の subjectification の質的な相違を、三項関係を構成する<人><事物>と<人><人>という二つの二項関係との関連で捉え直す。あわせ

て、Traugott の subjectivity 概念を言語現象に適用する際に生じる問題についても検討したい。

[1]『「私」とは何か』講談社。[2] Coming to Terms with Subjectivity *CL17*(3)。[3] Langacker (1985) Observations and Speculations on Subjectivity。[4] (1990) Subjectification。[5] (1997) Consciousness, Construal, and Subjectivity, *Language Structure, Discourse and the Access to Consciousness*。[6] Traugott (2010) (Inter) subjectivity and (Inter) subjectification: A Reassessment *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*。[7] 本多啓 (2011) 「共同注意と間主観性」『ひつじ意味論講座 5』。[8] (2011) 「言語に現れた主観性と間主観性」『人工知能学会誌』 26-4。

「双方向的認知構図の妥当性」

講師 中村芳久 (金沢大学)

理論物理学者ハイゼンベルグの「自然像は...もはや自然の像ではなく、自然とわれわれとの関係の像である」という言葉も、心理学者 W・ジェイムズの、私と対象の対峙を前提としない主客未分の純粋経験こそが万物(あらゆる概念)の起源だという論点も、実は Langacker(2008:35)の「われわれの世界理解は、動的で双方向的に構築されるものだ」ということと共鳴する。しかも脳科学的にもその通りなのだから、より単純な観る・観られ関係に基づく視点構図に加えて、主客の双方向的作用に基づく認知構築構図を導入することによって、より包括的な機能的言語理論が得られることが考えられる。本発表では、「寒い!」の主語なしの要因から、異なる認知能力を反映する題目から主語への文法化のメカニズム、言語進化等々にも触れながら、このような認知構図の詳細と、その導入による言語理論の説明力増強の可能性について議論する。

